

里地里山の保全・活用の取組における課題と技術的方策等

分類	ふれあい活動による里地里山生物への理解促進
手法名	五感で体感する里地里山の生き物(昆虫)ふれあい手法
主体	ぐんま昆虫の森、オオムラサキセンター、NPOくりやま等
背景(地域の課題)	里地里山保全活動を身近なものとして感じ、参加者のモチベーションを高める上で、生息する生き物に着目する視点は重要である。しかし、里地里山の生き物と接触する機会が限られる昨今、様々な方法でふれあえる体験を創出し、理解を深めることが求められている。
手法／方策の詳細	<p>ぐんま昆虫の森やオオムラサキセンターなどでは、昆虫をはじめとする里地里山の生き物を見るだけでなく、触れたり聞いたりするなどの五感を通じて多面的にふれあえる手法が考案され実施されている。</p> <p>(1)見る 観察施設周囲に雑木林や草原、池、ビオトープなどを整備して、昆虫の生きた生態を直接観察できる環境の創出を行う。また昆虫の生育プロセスを調整しサナギから羽化をする瞬間を観察することも技術的に可能になっている。</p> <p>(2)触れる 「ハンズオン」(触れて体験)の考え方の元、生息環境を落ち葉のベッドなどで体験する他、昆虫の種類に応じた触り方と観察方法を実地で指導することを通じて模擬分類を行い、記録をし、まとめ、昆虫についての理解を深めるなどの取り組みがある。また、生き物の生息特徴を利用した餌付け体験等の試みもある。</p> <p>(3)聞く 「昆虫マイク」と呼ばれる超高感度接触型マイクで、昆虫が歩くとき、食べるとき、脱皮するときなどに発する微細な振動を音に変換することが技術的に可能になっている。臨場感あふれる昆虫の新たな一面を見ることが出来る。</p> <p>(4)味わう 昆虫が吸っている蜜や食べ物などをアレンジして提供する里山カフェや樹液レストランなどが考案され実験的な試みが行われている。</p> <p>(5)嗅ぐ 装置を用いて様々な昆虫の発するにおいをじかに体験することができる展示方法が昆虫園施設等で開発されている。</p>
手法・技術的視点	<p>(1)五感を通じた体験による生き物理解の深まり 図鑑や標本ではなく、生きた生き物を五感を通じて体感する観察方法は生き物の生態をより深く理解するとともに、生息環境との相関関係についてもより詳しく楽しく学ぶことができることに特色がある。こうした体験的学習が次のステップとして里地里山保全活動へ誘導するモチベーションを高めていくものと期待できる。</p> <p>(2)生息環境の整備の促進や新たな活動への展開可能性 五感で体験する生き物観察のためには、生息環境整備が必要であることから、展示活動をきっかけに生息環境整備が促進される事例が散見される。また、樹液レストラン、里山カフェなどこれまで考えられてこなかった活動などが考案されるなど、取り組みの幅が広がる可能性があることも注目される点といえる。</p>

<p>実行プロセス・運営体制のイメージ</p>	<p>五感で体験する生き物ふれあい活動の構成要素</p> <ul style="list-style-type: none"> 見る <ul style="list-style-type: none"> ・生息環境での観察会、羽化等の観察 聞く <ul style="list-style-type: none"> ・昆虫マイクの活用 触れる <ul style="list-style-type: none"> ・種類別の触り方の体験と分類学習 ・生息環境の体験等 食べる <ul style="list-style-type: none"> ・里山カフェ ・樹液レストラン 嗅ぐ <ul style="list-style-type: none"> ・昆虫においボックスなど展示技術 <p>中央の緑色の楕円形内:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生態への理解 ・生息環境構築の促進 ・新たな活動の創出
<p>図・写真資料</p>	<p>四季折々のふれあい活動(写真:NPO法人くりやま)</p> <p>春 森のオリエンテーション・スプリング HHI</p> <p>夏 釣りand食べる</p> <p>秋 農業(収穫)体験</p> <p>冬 冬の里山を探る・ネイチャースノー・ハイク</p>
<p>参考資料</p>	<p>ぐんま昆虫の森、オオムラサキセンター、NPO法人くりやま(里なび研修会in北海道) NHKホームページ http://www.nes.or.jp/transfer/idea/2010/06/post-1/ http://www.nhk.or.jp/strl/open00/jp/j-27.html</p>